



Profile—呉 宣児

韓国生まれ。1995年にお茶の水女子大学大学院修士課程、2000年に九州大学大学院人博士課程修了。博士(人間環境学)。日本学術振興会外国人特別研究員、九州大学助手などを経て現職。専門は環境心理学、発達心理学、文化心理学。著書は『語りからみる原風景：心理学からのアプローチ』(萌文社)など。

日本の大学ガイドブック1冊だけを手に短期ビザで日本に来たのが1991年の冬。幼児教育や保育について勉強したいと思っていました。「学費の負担を減らすには国立! 新たな恋愛に陥らず勉強に集中するには女子大学!」が大原則でした。そしてお茶の水女子大学をまず訪れたのは、実は五十音順で調べて最初だったからでした。

お茶大や無藤隆先生については何も知らないまま、ガイドブックでお茶大に児童学専攻を見つけたという理由だけで、事前の約束もなく、留学に必要な書類を持って突然無藤先生を訪ねました。奇跡が起きました! 突然なのに、無藤先生がその場でハンコを押してくれたのです。「日本語は日本に住んでいればなんとかなるでしょう、しかし英語は重要です。ここの院は入りにくいから他の大学も調べたほうがいいよ」というコメントとともに。

研究の世界をまったく知らない私にとって、「日本」の「お茶大」の「無藤研」は新天地でした。初

越境と架橋

— Over Seas から Over “Over Seas” へ

共愛学園前橋国際大学国際社会学部 教授

呉 宣児 (お そんあ)

めの頃は、30人前後の友達・先輩院生は既に陸上のトラックで走っているのに、私はまだトラックにも立てずに観覧席でみんなが走る姿を外から見ていた感じです。無藤研では、研究の基本、心理学の基本を幅広く学びました。質問紙調査から保育園・幼稚園でのビデオ観察での行動分析・会話分析、実験による分析など、たくさんの研究のカタチをあらゆる角度から覗けたのは、初心者私にはとても幸運なことでした。

韓国では大きな社会的理念や争点になっているテーマを信念で語る雰囲気が強いですが、日本では生活の文脈に合わせて具体的なデータを持って語ることが多いという違いもありました。

その後私の関心テーマが「場所への愛着や原風景」などへ変わったので、1996年度から環境心理学を中心に勉強できる九州大学の南博文先生の研究室で博士課程を過ごすことになりました。九大の人間環境学研究科は、建築など異領域が一緒に入っており、教育学や心理学とは異なる文脈で研究・討論する機会が多かったと思います。

九大南研ではとにかく「自分でじっくり考える」機会がたくさん与えられていたように思います。「どうしてそう思いますか?」どのような用語・概念になりますか?」など、たくさん質問されるばかりで、「こうしなさい」という指示や答えを絶対にくれない南先生のやり方から、必然的に自分で考える習慣が養われたと思います。

また状況・環境と人を常にセツトとして捉えること、分解した部分ではなく全体として捉えること、トランザクションという視点の大事さなども学んだと思います。研究室全体が「質とはなにか、何をどのように見るか、表現するか・できるか」を常に問い、議論する雰囲気でした。

日本に慣れてきた証なのか、研究室のメンバーとの大きな喧嘩もありました。それは私には決して悪いことではなく、むしろ対等なメンバーの感覚があったからこそ嬉しいことでもありました。

日本での研究生活が安定してくると、いろいろな出会いが増えました。山本登志哉先生と伊藤哲司先生を中心に行われた円卓シネマの活動やお小遣い研究で、文化心理学の領域にも接することになりました。高橋登先生、サトウタツヤ先生、高木光太郎先生と同僚感覚の竹尾和子さん、中国の片成男さん、そして、日韓中越で活躍している多くの方々と、研究者として、また生活実践者としてデータや経験を基に討論し、時に喧嘩もしつつ学んできました。

2004年に着任した共愛学園前橋国際大学では、通常の授業以外に、学生を韓国に連れて行くなど、逆Over Seasの活動も行い、群馬県の前橋市では「地域づくりアドバイザー」といった役割も担っています。来日から25年目。もう、Over Seasの感覚は薄れて、地元のおばさんもしております。故郷韓国の濟州島も日本の地も、共に私の原風景になりそうです。